

小学校低学年児の投げかたの促発指導に関する研究

高野 早希 (秋田大学)

1. 目的

本研究では、まだわざの獲得に至っていない小学生を対象に、投げの基本的なわざであるショルダーパスを身につけていく過程を明らかにするために、投げかたの技術の向上・習得にはどのような方法が有効なのかを発生運動学の立場から事例を挙げて分析していこうとした。

2. 方法

佐藤(2004)が創作した、ボールを握れない、あるいは全身を使えない者に対する指導実践から普遍化した学習ステップの一つである「トルネード投げ」を練習の中心に取り入れ、関与観察を行いながら指導場面の様子をビデオに記録するとともに、その時々での気づきや変化を、運動学習に焦点を置いたエピソード記述で取り上げる。

- 1) 対象者：「ボール遊びの集い」に参加する小学1年生女兒Aさん、小学3年生男児Bくん
- 2) 期間：平成28年10月～平成29年12月の間にAさんに14回、Bくん10回の指導を行った。

3. 結果と考察

本研究では、観察・代行・交信していく中で得られた運動感覚の素材をもとに、AさんBくんそれぞれに適した方法で処方を行った。観察する中で、Aさんには“運動の言語化”をするよりも、目の前で模範をしたり、直接動き方を感じさせたりすることが有効であり、Bくんにはより実践的な場面で、シュートを決めることや正確なパスへの気持ちを強くさせることが有効であることを明らかにすることができた。また、二人に共通するものとして、腕振り投げの投げかたを意識させるためには「トルネード投げ」が有効なこと、「目標投げ」に分類されるショルダースローの「目標」の設定が重要なことの二点を明らかにすることができた。

ここでは、実際の指導の中で、特に大きな変容が

見られたAさんの事例を紹介する。図は、観察1日目(図1)と13日目(図2)のAさんのボールを投げる様子をそれぞれ連続写真にしたものである。

観察1日目で、ボールを押し出すような投げかたであったAさんは、観察13日目には腕振り投げの投げかたを感じ取れるようになった。



図1



図2

4. 結論

普遍化された指導法を用いる際は、ただ学習ステップを踏んでいくのではなく、それぞれの子どもの運動感覚に適したやり方を模索し、コツを「個人化」していくことが大切である。そのためにも、指導者の促発分析能力は欠かせない。

また、一人ひとりが持つ運動問題は多様であり、より子どもに合う指導法を見つけるためには、多くの実践を重ねる中で何通りもの方法でアプローチしていくことが求められる。そのためにも、一人ひとりの得意なことや癖、個性などをしっかり把握することが重要である。今後は、すでに癖として「自分の投げかた」を定着させている子どもたちに対する運動修正のアプローチの仕方を検討していく必要がある。

〈参考文献〉

- 1) 金子明友 (2002), 「わざの伝承」, 明和出版
- 2) 鯨岡 峻 (2005), 「事例研究の質を高めるためにー関与観察とエピソード記述の周辺ー」, スポーツ運動学研究 15, pp. 1-12
- 3) 佐藤 靖 (2004), 「運動嫌い、苦手意識を克服させるための基礎基本ーボール運動を例にー」, 体育科教育 : vol. 52, no. 4, pp. 44-48